

港のたより



(一社) 寒地港湾技術研究センター
COLD REGION PORT AND HARBOR ENGINEERING RESEARCH CENTER



北海道海洋深層水フェア(平成25年11月)

Contents

行事報告

ザ・シンポジウムみなと in 苫小牧 2

港湾ニュース

「苫小牧港西港区西ふ頭耐震強化岸壁供用開始記念式」について 4

北海道国際輸送プラットフォーム推進協議会の設立について 5

「北海道海洋深層水フェア」の開催について 6

第52回北海道開発局空港技術研究会議の開催 7

「港湾空港技術特別講演会 in 札幌2013」の開催について 8

「白老港第3商港区供用開始記念式典」の開催 9

第10回「みなと座談会」の開催 10

JATA 旅博2013への参加について 11

平成25年度国土交通省「国土技術研究会」について 12

地域での「北海道マリンビジョン21」の取り組みについて

ウトロ地域マリンビジョン協議会からの報告 13

センター通信

第2回常任委員会の開催 15

第2回広報委員会の開催 15

メールアドレス登録へのご協力依頼 16

編集後記 16

vol. 107
2013.12.26

行事報告

ザ・シンポジウムみなと in 苫小牧

(一社) 寒地港湾技術研究センター

平成 25 年度の「ザ・シンポジウムみなと」は、11 月 28 日（木）に苫小牧市において開催されました。

本年度は、開港 50 周年を迎える苫小牧港の歴史を振り返り、先人たちの功績や港湾が果たしてきた役割を広く周知するとともに、国際物流の動向に迅速に対応する国際拠点港湾として新たな価値や魅力の創出を目指し、苫小牧港の未来を切り拓く意識と発信力を高める契機として議論していただくために開催されました。当日は苫小牧市をはじめ全道各地から約 280 名の方々が参加されました。

はじめに、主催者として「ザ・シンポジウムみなと実行委員会」の水野委員長から、来賓として苫小牧市長の岩倉 博文様からご挨拶がありました。

基調講演は、政策研究大学院大学客員教授で前国際港湾協会（IAPH）事務総長の井上 聡史氏が「世界の港湾の戦略変化と日本」と題して講演を行い、経済のグローバル化と国際海運輸送の増大が港湾機能の歴史的な構造変化をもたらし、「物流時代の港」から「サプライ・チェーン時代の港」への変貌として新しいロジスティクス付加価値を提供する港湾づくりが求められているとし、ロジスティクス・パークの開発事例としてドイツのブレーメン港と米国・ジョージア州のサバナ港が紹介されました。また、革新的コンテナ・ターミナルの開発として、港湾の規模に応じた自動化



来賓挨拶 岩倉苫小牧市長と市のキャラクター「とまチョップ」

や背後圏アクセスの強化、港湾情報システムの展開が求められていることについて、世界のごく最近の変化や動きについて他の港湾事例とともに紹介され、その上で、日本の港湾がとるべき道として、日本の港湾が持つ位置的な優位性を生かし、成長するアジア市場と連携した国土、地域づくりのためのアジア地域ロジスティクス・システムの構築が不可欠であるとして、国内港湾及び苫小牧港への具体的な戦略等が提言され、講演が締めくくられました。

休息を挟んだ後のパネルディスカッションでは、北海道大学公共政策大学院特任教授の小磯 修二氏がコーディネーターを務め、パネリストとして苫小牧市



開会挨拶 水野委員長



基調講演 井上聡史氏

長の岩倉 博文氏、北海道経済部長の辻 泰弘氏、神戸大学名誉教授の黒田 勝彦氏、苫小牧商工会議所会頭の藤田 博章氏、女性みなとまちづくり苫小牧代表の大西 育子氏の6名の方が参加され、「苫小牧港の未来戦略」をテーマに討論がなされました。

それぞれの立場から、苫小牧港の50年を振り返り思いを述べられた後に、今後の展開に向けて、岩倉市長から「市民と一体となって、50年先の苫小牧港に向け、いろんなチャレンジをしていきたい。ロジスティクスの具体的な展開が港湾・まちづくりのポイント」、辻部長から「北極海航路の活用で欧州が近づき、苫小牧港を拠点に自動車部品や農産品などグローバルな展開が期待できる」、黒田教授から「都市が持つ地理的優位性として、千歳と苫小牧の鉄道沿い中間地点に、港と空港貨物をにらんだ物流センターを整備」、藤田会頭から「今後も苫小牧港への企業誘致に貢献したい。ご当地ソングのない苫小牧に港町ブルースができることを期待」、大西代表からは「ホッキ貝など今地元にあるものを活用し、できることから地域の活性化を図ってはどうか。」とのご提案がありました。

最後に、小磯コーディネーターから「世界の潮流は北方圏にあり、アジアの中の苫小牧港が持つ地理的優位性をどう都市戦略に生かすかが求められる。」と述べられ、シンポジウムが終了しました。



パネルディスカッション



全体風景

開港50年～未来を拓く苫小牧港
苫小牧港の歴史を振り返り今後の戦略を考える

ザ・シンポジウム
みなとin苫小牧

平成25年 11月28日(土) 14:00～17:00
苫小牧グランドホテルニューエッセ
3階グランドホール 苫小牧市東町1丁目3-1 TEL0144-51-1111

PROGRAM

- 14:00 開会挨拶 水野 雄三 (ザ・シンポジウム実行委員長)
- 14:10 来賓挨拶 岩倉 博文氏 (市長)
- 14:10 基調講演 世界の港湾の戦略変化と日本 井上 聡史氏 (経済研究大学経済学部長)
- 15:10 休憩
- 17:00 閉会

パネルディスカッション「苫小牧港の未来戦略」

- コーディネーター**
小磯 修二氏 (北海道大学名誉教授、苫小牧市名誉市民)
- パネリスト**
岩倉 博文氏 (市長)
- パネリスト**
辻 泰弘氏 (北海道経済部長)
- パネリスト**
黒田 勝彦氏 (神戸大学名誉教授)
- パネリスト**
藤田 博章氏 (苫小牧商工会議所会頭)
- パネリスト**
大西 育子氏 (女性みなとまちづくり苫小牧代表)

NEWS 港湾ニュース

■「苫小牧港西港区西ふ頭耐震強化岸壁供用開始記念式典」について

苫小牧港管理組合 企画振興課

平成 19 年の港湾計画改訂において、苫小牧港西港区の RORO 船ターミナルである西ふ頭の耐震化が位置づけられ、平成 23 年度から岸壁の耐震化改良と背後のヤードについて整備を進め、この度、耐震強化岸壁が完成しました。

去る 9 月 15 日に、苫小牧港西港区「北ふ頭キラキラ公園」におきまして、北海道開発局室蘭開発建設部と苫小牧港管理組合の共催のもと、「苫小牧港西港区西ふ頭耐震強化岸壁供用開始記念式典」を開催しました。

当日は、あいにくの雨の中でしたが、式典には、関係者約 60 名が出席し、北海道と本州を結ぶ主要な物流拠点施設の完成を祝いました。



岩倉苫小牧市長の挨拶

テープ・カット

式典では、主催者を代表して苫小牧港管理組合管理者・岩倉博文苫小牧市長が、「耐震強化岸壁が完成し、当初の予定より早く完成しましたことを関係者に感謝したい。また、苫小牧港は、今年開港 50 周年を迎え、新たな 50 年の確かな第一歩の年であり、新しい施設の完成によって国際拠点港湾として、今後とも重責を担いたい」と述べました。

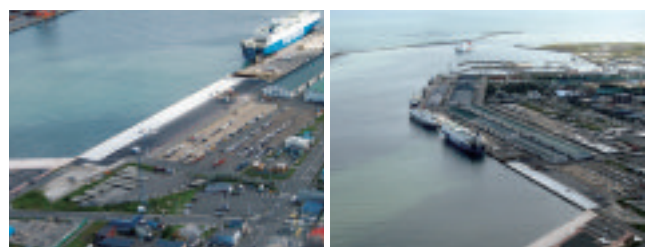
次に、北海道開発局の戀塚貴室蘭開発建設部長の主催者あいさつに続き、国土交通省の山縣宣彦港湾局長が、梶山弘志国土交通副大臣のあいさつを代読していただき、堀井学、高橋みほ両衆議院議員、遠藤連苫小牧港管理組合議会議長が祝辞を述べられました。

最後に、苫小牧港管理組合と室蘭開発建設部苫小牧港湾事務所による事業概要説明の後、テープカット・くす玉割りが行われ、完成を祝いました。

苫小牧港西港区西ふ頭は建設から 40 年以上経過しており施設の老朽化が著しく、また、一般貨物船用に整備されているため、トレーラーや完成自動車等の車両旋回スペースが不十分であるなどの、非効率な荷役形態を強いられています。さらに、西港区において大規模地震発生時における海上からの緊急物資輸送の確保が課題となっていました。

延長 660 メートル（うち耐震構造 220 メートル）に及ぶ岸壁工事は、平成 29 年度まで続く予定となっております。

西港区で初の耐震強化岸壁の完成により、荷役の効率化が実現すると共に、大規模地震時の非常時における柔軟な運用も可能になり、緊急物資の輸送拠点としての機能が期待されます。



西ふ頭 耐震強化岸壁 全景

北海道国際輸送プラットフォーム推進協議会の設立について

北海道開発局 港湾空港部

北海道開発局と札幌大学は「国際物流を通じた道産品輸出促進研究会」（以下、研究会）を平成 23 年 10 月に発足し、公益団体及び民間企業の協力のもと、道産品の輸出拡大に向けた「北海道国際輸送プラットフォーム（略称 HOP）」構築事業を進めてきました。

本研究会は札幌大学と北海道開発局のみを構成員としており、公益団体及び民間企業の参加者はオブザーバーとしての立場で参加し、様々な意見をいただいていたいました。

しかし、HOP の取組が多方面に展開する中で、民間企業等がオブザーバーという立場のままでは、主体的な活動を行っていくという課題が出てきました。

そこで、北海道国際輸送プラットフォームのさらなる発展に向け、各参加者が主体性・機動性をもって協議を行える場として、「北海道国際輸送プラットフォーム推進協議会（以下、協議会）」を設立することとなりました。

平成 25 年 9 月 27 日、「第 1 回北海道国際輸送プラットフォーム推進協議会」が開催され、協議会員による規約の了承により、協議会が正式に発足しました。

協議会員は、札幌大学・北海道開発局・北海道で構成する事務局 3 者、北海道経済産業局・北海道経済連合会・フード特区機構を始めとする経済団体・官公庁 10 者、ヤマトグループや北海道テレビ放送、金融機関を始めとする民間企業 18 者の計 31 者で構成され、また、札幌大学経営学部の千葉博正教授が会長として選任されました。



第 1 回協議会開催状況

第 1 回協議会では、自己紹介を兼ねた各協議会員の取組事項の紹介の後、今後の協議会の進め方や各種取組の進捗状況等について議論されました。(株)北洋銀行からは、HOP1 サービスを活用した商談会の開催報告、北海道ブランディング(株)からは B to B マッチングサイトとの連携についての報告がありました。その他、様々な業種の協議会員からの提案があり、今後新たな事業展開が期待されます。

今後、協議会では、HOP を活用した輸出貨物を創貨する取組（シンガポール等におけるテレビ・ネットショッピングの取組、サンプル輸送の取組等の関連事業）の実施に向けた検討を中心に行う予定です。



HOP ロゴマーク

そのため、協議会内にネットショッピング G や海外おみやげ宅配便 G 等の検討グループを設置し、各取組を、スピード感をもって進めることとなりました。また、HOP サービス利用者の中から HOP 拡大に貢献する企業を表彰する制度を創設することや、HOP のロゴマークを決定しました。

本協議会の設立を機に、北海道産品のさらなる輸出拡大を図るべく、各者一体となった取組を今後とも進めて参ります。

番号	表題	概要
1)	ネットショッピング G	共同購入のような仕組みで小口貨物を複数個詰め合わせ低価格で海外へ配送する。
2)	国際発注システム G	インターネットを通じて海外事業者が道産品を直接購入できるシステム構築。
3)	メニュー提案も含めたセット販売 G	メニュー提案に合わせた食材をセットにして飲食店、個人に販売する。
4)	海外おみやげ宅配便 G	海外観光客に輸送費込みの土産物セットを販売し、自国まで宅配輸送する。
5)	商談会 G (各商談会により複数の可能性有り)	商談会前にバイヤーにサンプル輸送で商材を見せる。HOP1 を活用した価格提示等 HOP1 機能を活用した商談会の実施。
6)	テレビショッピング G	シンガポールでのテレビ放送機能を活用したテレビショッピングの実施。
7)	スイーツ事業者振興との連携 G	経産局が進めるスイーツ事業者振興と連携したサンプル輸送事業等を進める。
8)	B to B マッチングサイトとの連携 G	サイト上でマッチングした企業間の取引を HOP1 サービス等を通じて支援

各関連事業の検討グループ（案）

「北海道海洋深層水フェア」の開催について

～自主研究「海洋深層水の多目的利用に関する研究」～

(一社)寒地港湾技術研究センター 調査研究部

1. はじめに

北海道の海洋深層水を使った商品をPRする「北海道海洋深層水フェア」を、平成25年11月14日(木)に、札幌駅前通地下広場(チ・カ・ホ)の北3条交差点広場(西)において開催しました。

フェアは、岩内町、八雲町、羅臼町の3町と当センターとの共催で、NPO法人北海道みなとの文化振興機構の協賛をいただいて開催しました。

このフェアは、本年度で3回目となります。

2. フェアの目的

北海道における海洋深層水の取水地は、岩内町、八雲町(熊石地区)、羅臼町の3カ所ですが、いずれも港湾・漁港内に取水施設が整備されています。

海洋深層水の利用方法としては、その特徴である低温性・清浄性・富栄養性を生かして、主に水産業で利用されていますが、飲料水、塩、総菜・菓子などの食品利用を始めとして化粧品製造や野菜栽培など幅広い分野でも利用されています。

しかし、こうした商品については、認知度が高いとは言えない実状にあり、原因の一つとして、海洋深層水そのものの認知度が低いことも挙げられています。

当センターでは、こうした海洋深層水利用に関する課題に対し、海洋深層水の認知度を高めることや、海洋深層水商品をPRすることにより、海洋深層水の利用拡大を図り、地域振興に寄与することを目的として、「海洋深層水の多目的利用に関する研究」をテーマとした自主研究に取り組んでいます。本フェアは、その一貫として企画したものです。

3. フェアの概要

今年は、数ある海洋深層水商品から、昨年好評だった代表的な塩や飲料水に加え、ドラ焼き、味噌、米、サクラマスといった新商品を含む全26品が出展されました。

販売にあたっては、各町の担当者や製造者の方々が売り子となって商品説明や試食・試飲をしていただき、お客様に商品の良さを実感してもらいました。

フェアの出展商品内訳

町名	出展商品
岩内町	岩内の天然水(500ml)
	たらドラ
	塩(100g)
	サケトバ(100g)
	ニシン伝心(ニシン燻製)
	にしん燻
	煮豆(黒・金時・白花)
	ちりめん佃煮
八雲町	焼きアワビ(真空パック)
	塩もち(菓子)
	釜焚き 一番塩100g
	万葉の詩 白100g
	万葉の詩 濃塩100g
	ピュア27(化粧品)
	シャーベットソルト(化粧品)
	サクラマス(真空パック)(塩蔵)
	タコ塩辛(3種)
	米(900g)
塩もち	
羅臼町	知床 深海の水 350ml、500ml
	クリオネラムネ(200ml)
	北海道生ラーメン(味噌・醤油・塩)
	知床の塩 「極」(50g)
	知床の塩 3種セット
	ラウシップ(塩)180g、500g
	羅臼こんぶ塩(120g)

当センターでは、海洋深層水の認知度や商品に対する要望などを把握し、本研究の今後の取組の参考とするため、今年もアンケートを実施しました。

また、北海道のみなのキャラクターであるぽーとん・べいくりと風船が子供達に大人気でした。

午前11時に開始したフェアは、商品もわずかととなり、お客様の波も一段落した午後4時半に終了しました。



商品販売の様子

4. 今後の予定

今後は、今回のフェアの開催実績とアンケート回答結果等を分析するとともに、効用の既往科学的知見や



アンケートの様子

商品事例の情報収集と企業ヒアリングを行い、更なる利活用拡大の方策を検討していく予定です。



子供たちに人気のぼーとん・べいくりん

■ 第 52 回北海道開発局空港技術研究会議の開催

北海道開発局 港湾空港部 空港課

平成 25 年 11 月 18 日に北海道開発局研修センター講堂にて第 52 回北海道開発局空港技術研究会議を開催し、およそ 100 名の参加がありました。

本会議は、空港整備に携わる担当者の技術の研鑽などを図る目的で空港管理者（国・自治体）、建設業社、建設コンサルタントなどの方々に聴講していただきました。

開催にあたり、北海道開発局港湾空港部空港課 平澤課長から、空港の安全安心に一層尽力していかねばならないとの挨拶で始まりました。

特別講演として「滑走路端安全区域の整備について」（航空局安全部空港安全・保安対策課藤田係長）、その後「北海道における中温化舗装技術の適用について」（独立行政法人土木研究所寒地土木研究所安倍主任研



究員)、「空港アスファルト舗装の層間剥離・ブリスタリングについて」（国土技術政策総合研究所坪川主任研究官)、「新誘導路建設に伴い、供用トンネルを航空機荷重対応へ」（成田国際空港(株)林グループ員)、「道内空港における航空機小型化に伴う国内航空貨物輸送への影響について」（北海道開発局港湾空港部空港課東館係長)、最後に「関西国際空港の施設整備の現状と今後の課題」（新関西国際空港(株)中谷グループリーダー)に発表していただきました。

発表して頂いた内容について積極的な質疑があり、聴講者の方々の関心の高さが窺えました。

お忙しい中、本研究会議で発表していただいた皆様ならびに聴講にお越しいただいた皆様に感謝申し上げます。

「港湾空港技術特別講演会 in 札幌 2013」の開催について

北海道開発局 港湾空港部 港湾建設課

平成 25 年 11 月 11 日、北海道開発局(以下、開発局)、国土技術政策総合研究所(以下、国総研)、(独)港湾空港技術研究所(以下、港空研)および(独)寒地土木研究所(以下、寒地土研)の共催による「港湾空港技術特別講演会 in 札幌 2013」を札幌第 1 合同庁舎 2 階講堂にて開催しました。

本講演会は、港湾・沿岸環境並びに空港分野に関する最先端の研究、技術開発成果を情報提供することを目的に毎年開催しております。

冒頭、開催にあたり、開発局の川合港湾空港部長から「若手技術者が減少し、技術の伝承が課題となっている中で、港湾空港の技術力の向上を目指している本講演会は重要な役割を果たしている。参加している開発局職員、港湾管理者、民間企業の皆さん、オール北海道で港湾空港技術の伝承に取り組んでいただきたい。」と挨拶がありました。

はじめに、港空研の高橋理事長、国総研の吉田管理調整部長から両研究所の概要、研究活動などについて紹介があり、続いて、港空研の栗山特別研究官から「漂砂対策に関する最近の動き」と題して、海岸浸食・港内埋没のメカニズムと漂砂対策の説明、国内外のサンドバイパスの実施事例の紹介がありました。

港空研基礎工研究チームの水谷リーダーからは、船舶の大型化に伴う既設岸壁の増深需要が高まる中、重力式岸壁について、捨石マウンドの一部を改良・固化することにより法線位置を変更せずに岸壁を増深する工法について説明がありました。また、港空研の吉江新技術研究開発領域長からは、航路部の津波対策として開発が進められている浮上式防波堤について、高精度施工のための下部工真円度計測装置など、新技術についての紹介がありました。

次に、国総研の小泉港湾研究部長から港湾施設の老朽化対策の推進、地震津波対策の推進、港湾の技術基準類の国際化・国際展開の推進について説明をいただきました。

国総研空港研究部の坪川主任研究官からは、経験的に設計されていた空港舗装について、理論的設計法の導入経緯と問題点についての説明があり、理論的設計法の有効性について紹介されました。

特別講演では、北海道大学大学院の横田教授から「港湾構造物の維持管理の動向と戦略」と題する講演があ



講演会の様子

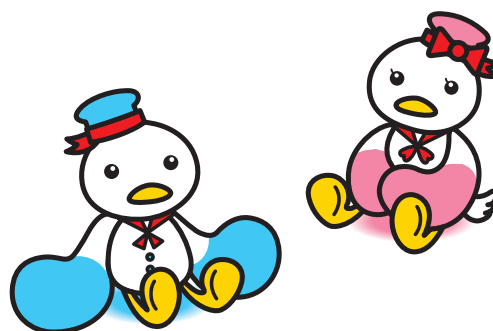
りました。港湾施設の維持管理に関する最近の動向、維持管理における点検調査の重要性、調査法の選定、構造性能の目視点検による推定・予測について説明があり、良好な維持管理の実践には、特に目視点検の確実な実施(選択と集中)が重要であると述べられました。

最後に、寒地土研寒冷沿岸域チームの山本上席研究員から流水に関する研究例、海水による鋼構造物の損耗・劣化対策に関する研究報告があり、設計において流水の影響を加味する必要性について説明がありました。

当日は、建設会社、コンサルタント会社、港湾管理者、開発局職員など約 140 名の参加をいただきました。

会場では、熱心に聞き入る姿や、最新の情報に対して活発な質疑がなされるなど、参加者の関心の高さが窺えました。

最後に、講演をいただいた研究者の方々、ご多忙の中、講演会に参加をいただきました皆様へのお礼に代え、報告とさせていただきます。



「白老港第3商港区供用開始記念式典」の開催

白老町 産業経済課 港湾担当課長 赤城雅也

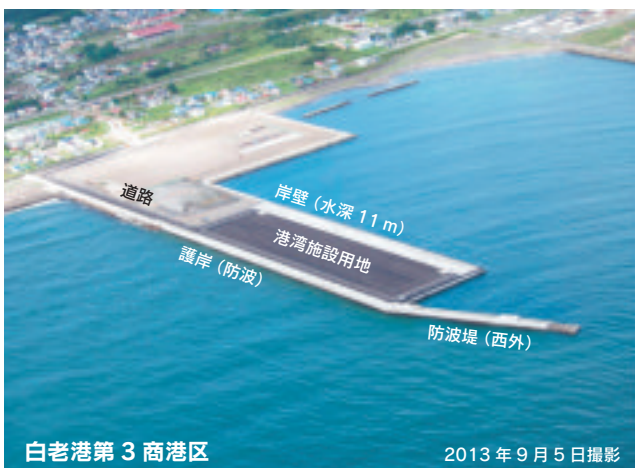
1. 白老港の概要

白老港は、北海道の南西部、胆振振興局管内のほぼ中央に位置し、白老町が管理する地方港湾です。本港は昭和57年8月に新規着工した北海道で最も新しい港湾で、平成2年12月に漁港区の一部を供用開始以来、平成7年5月に待望の第1商港区(水深5.5m岸壁2バース)、平成13年4月には第2商港区(水深5.5m岸壁3バース・水深7.5m岸壁1バース)及び流通活動の拠点となる公共中央1号上屋も併せて供用開始され、本港利用による輸送時間及び輸送コスト削減が図られていることなど港湾整備の効果が確実に表われ、取扱貨物量が増加し地域とともに発展してきました。



2. 第3商港区整備目的

本港は、建設途上の港であることから、現有施設だけでは地元企業の物流需要を扱うための係留施設延長が不足しているほか、大型岸壁が整備されていないため他港からの長距離輸送による非効率な物流形態を強いられているなど、地域産業の競争力を確保するための物流の効率化が大きな課題になっており、内貿ユニッ



ト貨物輸送に対応した物流機能の拡充を目指して、北海道の地方港湾で初の水深11mの大型岸壁の整備が平成18年度から本格的に着工となりました。

3. 事業概要

事業内容

岸壁(水深11m)	240m
泊地(水深11m)	19.1ha
港湾施設用地	1.9ha
道路	1,048m
防波堤(西外)	290m(うち供用開始時は140m完成)
護岸(防波)	545m

事業期間 平成17年度から平成28年度(予定)

総事業費 約150億円(平成26年度以降の予定事業費を含む)

4. 供用開始記念式典

着工から8年を迎えた第3商港区整備事業は、防波堤を除く工事が完了し、11月2日に北海道開発局室蘭開発建設部、白老町の主催による供用開始記念式典が挙行されました。

式典には、主催者側から戀塚貴 室蘭開発建設部長、戸田安彦 白老町長が、来賓として深海正彦 国土交通省北海道局港政課長、川合紀章 北海道開発局港湾空港部長、堀井学 衆議院議員をはじめとした港湾及び地元関係者など約100名が出席し、盛大に供用開始が祝われました。

初めに、港湾管理者の戸田安彦 町長が「今後とも道内物流拠点としての充実に加え、地震、噴火等の大



供用開始記念式典テープカットの様子

きな災害時に貢献できる港として、機能的で利用しやすい港湾となり、なお一層地域に親しまれる港湾になっていくと考えている。」また、戀塚貴 室蘭開発建設部長は「第3商港区の供用により、道央圏物流の一翼を担う役割が一層大きくなり、地域経済への寄与が一段と高まったものと考えている。」と式辞を述べました。次に来賓の堀井学 衆議院議員ら国会議員5名、道議会議員2名からの祝辞、伊藤晃 苫小牧港湾事務所長による工事報告あり、その後町内外の関係者14名の方々によるテープカットが行われました。

5. 効果と利用

防波堤の整備が残されていますが、水深11m岸壁からの荷役が可能となり、大型船舶による大幅な輸送コストの削減や第1・2商港区の狭隘解消が図られなど、様々なニーズに対応できるようになり、入港船舶の増加及び入港可能船舶の拡大による新規企業の利用により、地域経済の活性化や雇用の拡大などその効果が期待されます。

■ 第10回「みなと座談会」の開催

NPO 法人北海道みなとの文化振興機構

今回で10回となる「みなと座談会」を紋別市で10月30日（水）開催しました。

北海道みなとまちづくり女性ネットワークの協力を得て、みなとを核としたまちづくりを女性の視点から考え、実際の活動を通じた意見交換の場として、平成16年から毎年開催してきました。

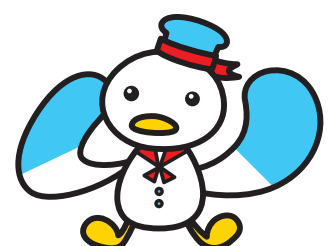
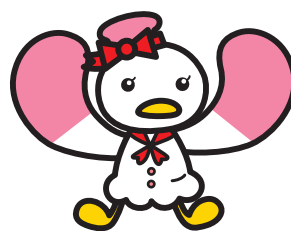
座談会は、はじめに特別講演として紋別商工会議所青年部専務理事の山崎彰則氏から、紋別のまちおこし「紋別の特産品を生かしたまんぷく横丁開催、新たな出会いを支援する街コン開催」などイベント開催に至るまでの経緯や課題更に開催情報の発信方法など貴重な活動体験をご紹介していただきました。

続いて、全道の女性ネットワーク各地区会員代表による当年度行った活動内容の報告があり意見交換の場では、より充実した活動を得るには“他まちづくり団体と連携”をとることも必要との貴重なご助言をいただきました。

翌31日（木）流水砕氷船ガリンコ号Ⅱに乗船し、紋別港を海から見学しました。

力強く心地よい船の振動とともに、港湾施設の説明を受けて紋別港が新たな飛躍を遂げようと歩んでいることが見えました。

多忙なおり座談会に出席頂いた北海道開発局、紋別市など行政の皆様や女性ネットワーク会員の皆様、みなと座談会開催に向けご協力頂いた皆様に厚く御礼を申し上げます。



JATA 旅博 2013 への参加について

北海道総合政策部 交通政策局 物流港湾室 主査 工藤一浩

四方を海に囲まれ海の玄関として 35 の港湾がある北海道では、東京ビッグサイトで開催された「JATA 旅博 2013」（会期：H25.9.12～15）に初めて参加し、クルーズ船による来道者の増加や離島航路、日ロフェリー定期航路（稚内港～ロシア連邦サハリン州コルサコフ港）の利用促進に向け、本道の港の PR を行いました。

「JATA 旅博 2013」は、一般社団法人 日本旅行業協会（Japan Association of Travel Agents）が主催するアジア最大級の規模と実績を誇る旅行・観光イベントです。

今年は「旅で示そう 日本の元気」をテーマに、世界各国の政府観光局や旅行会社、クルーズ船社など 154 の国と地域から 730 の企業・団体が参加する過去最大の出展規模で開催され、来場者数も 13 万人を超えました。

北海道では、今年度から各港湾管理者との連携を強化し、本道の各港湾の共通する課題の検討・解決を進め、各港湾の機能強化を図ることを目的とした「港湾機能強化連携推進事業」を実施しています。

今年度は、近年、国際的にも急速に関心が高まっているクルーズ客船の誘致など港湾における人流拡大に向け、一般道民向けの「クルーズセミナー」の開催や「クルーズ船・離島航路利用者のニーズ等調査」などの取り組みを実施しており、今回の出展もこの事業の一環として実施したものです。



ブースの運営には、当室の職員の他、クルーズ船の主要な寄港地である室蘭、苫小牧、函館、小樽、釧路や離島航路のある羽幌、利尻の港湾管理者等に協力をいただき、総勢 21 名が参加。港湾管理者等から提供いただいたパンフレットの配布や観光用 DVD を上映

しながら、来場者へ各港の説明や地域の PR などを行いました。

また、近年、地域の観光 PR に大いに活躍する、ゆるキャラ「オロ坊（羽幌町）」と「りしりん（利尻町）」が登場した際には、来場者も足を停めて一緒に写真を撮るなど、開催期間中、各港湾のみならず北海道の魅力ある観光地などを大いに PR しました。



また、本道港湾の効果的な利用促進策検討に向け、来場者に対するアンケートを実施しました。

回答者には各港湾管理者から提供いただいた「地域の特産品」などを配布する旨、あわせて告知したところ、多くの方の協力をいただき、「こんなに港があるとは知らなかった。」「話が楽しく北海道に行きたくなった。」「このブースに来て、ぜひクルーズ船で北海道へ旅をしたいと思った。」など、北海道に対する関心の高さや本道港湾の利用促進に向けた課題やニーズなどを把握することができました。

また、旅博会場では国際商談会も実施され、ドイツ、オーストラリア、インドネシア、中国など 10 ヶ国（地域）・14 社の海外旅行代理店に対し、港湾管理者とともに「北海道の港湾を利用した観光地ツアー」などの紹介を行いました。

各国の担当者からは「日本の中でも、特に北海道の認知度や評判が高いこと」や「離島」や「クルーズ船で来道した際の観光スポット」などに関する資料要望などもあり、改めて北海道の港や地域の観光資源の潜在需要の高さを認識することができました。

今後はこれらの成果を分析し、報告書として取りまとめ港湾管理者等に提供するとともに、本道港湾の効果的な利用促進策検討につなげたいと考えています。

■ 平成 25 年度国土交通省「国土技術研究会」について

北海道開発局 港湾空港部港湾計画課 三岡照之

国土交通省「国土技術研究会」は、国土交通省所管の住宅・社会資本整備行政に係る技術課題、中長期的又は緊急的に取り組むべき技術課題等について、本省、地方整備局、北海道開発局、地方航空局、試験研究機関等が連携を図りつつ調査・研究を行い、議論を重ねることにより、国土交通省が所管する住宅・社会資本整備に関する技術の向上と行政への反映を図ることを目的として毎年開催されています。

11月7日、8日の両日に霞ヶ関の中央合同庁舎2号館において開催された研究会に、参加してきましたので概要を報告します。



7日(木)

は、午前中指定課題等についての個別発表があり、午後からは東京大学大学院工学系研究科の家田仁教授の特別講演「今後の社会資本

の維持管理・更新のあり方」がありました。引き続きパネルディスカッション「社会資本の維持管理・更新に関する各機関の取組状況と今後取り組むべき施策について」が開催され、家田先生始め、成蹊大学経済学部の井出多加子教授などの有識者による活発な議論が行われました。

パネルディスカッションでは、今回の国土技術研究会の主なテーマである「社会資本の維持管理・更新」を中心とした議論が進められましたが、特に、「新築事業は、技術者も建設業者等もモチベーション高く取り組むが、維持管理事業などはモチベーションが低いのではないか。新人も「大きな橋を建設したい」と入ってくる者はいるが、「この橋を維持管理したい」と入ってくる者はいない。ゼネコンも維持管理の新たな技術開発には積極的でない。しかし、大事な事だから皆がモチベーションを持ってもらえるような仕組みを考え

ていく必要があるのでは」との家田先生の問いかけは、とても興味深い課題かと思いました。

8日(金)は、自由課題を中心に51課題の報告(北海道関係は6課題)が行われました。道路路面下の空洞を発見する技術、河川堤防における物理探査手法を用いた総合安全性評価(簡易な物理探査、過去のデータ等の情報から健全度を総合的に判定する手法)など、様々な土木技術や、各種災害(地震・高潮等)時の被災対応から得られた新たな知見について報告等があり、とても有意義な1日となりました。

私も昨年度の北海道開発技術研究発表会で発表した「国際物流活性化の検討について～北海道国際輸送プラットフォームの構築～」について、北海道代表として報告してきました。数ある全国の土木技術の発表に混ざり、ソフト的な取組で少し違和感を感じつつ、とてもおもしろい取組だと興味を持って聞いて頂き、沢山の質問も受け、北海道代表に恥ずかしくない発表はできたのではないかと思います。補足ですが、部門毎に最優秀賞と優秀賞が選ばれる中、私も優秀賞を受賞し、足立技監から表彰状を頂いてきました。これも「北海道国際輸送プラットフォーム」の取組に協力頂いている皆様のお陰かと思っておりますので、この場を借りて感謝申し上げます。



研究会での報告の様子(筆者)